

かながわ淡水魚復元研究会会報『相模・武蔵の自然探検』投稿規定

1. 創刊の趣旨

かながわ淡水魚復元研究会（以下、本会と表記）は、絶滅が危惧される生物や自然環境に関して調査研究・保全事業を行うと共に、広く市民に対して自然観察会や学習会などに関する事業を行い、環境の保全や学術の振興に寄与することを目的としています。本会の活動を促進するにあたり、オンライン誌『相模・武蔵の自然探検』を刊行することに致しました。

本会の会員の多くは、自然の愛好家や保全関係者といった、いわゆる市井の方々が占めます。これらの方々にとって、既存の学術誌（学会誌や地方誌）は執筆、閲覧の両面で敷居が高いと言えます。会員の中には専門家（本職の研究者やそれを目指す大学院生）も含まれますが、それらの方々は独自に学会や研究会などに入会して学術誌を活用しています。これまでは、そうした一部の有識者が、専門知識を分かりやすく噛み砕いて共有することで対処されてきましたが、その効果は十分ではありません。特に、データに裏付けされたスタンスの共有・維持に至らないことが、保全活動の足かせとなり、数年から数十年規模での活動の瓦解が各地で後を絶ちません。自然を守り、維持するためには、本来、地球規模の気候変動をも視野に入れ、数百年後の未来を見据えた活動実績を後世に引き継ぐ必要があります。

そのような状況下で、市井の方々と専門家をつなぐ役割を担う「情報が集まる場」が有用だと考えます。目指すところは、学術誌としては敷居を抑え、かつ専門家が引用することの出来る信ぴょう性の高い情報が集まる雑誌です。本会発足に合わせ、上記の役割を担う雑誌として『相模・武蔵の自然探検』を刊行し、その継続的な活用を目指すことと致しました。

『相模・武蔵の自然探検』では、本会の活動で得られた情報をはじめ、本会の目的に直接的あるいは間接的に資する内容を幅広く扱います。本誌は、市井の方々が参加しやすい情報発信の場として、既存の専門誌での取り扱いが難しい内容を特に歓迎致します。その観点から、専門性の高い内容はしかるべき他誌への投稿をおすすめ致します。生き物について、興味深い情報が得られましたら、まずはお気軽に編集委員会までご連絡下さい。

2. 取り扱う内容

本誌への掲載をおすすめする内容の例を以下に示します。

- ・新規性や斬新な示唆を含む内容であるものの、データ数が少ないもの。
- ・まとまったデータ数があるものの、新しい知見があまり得られなかったもの。
- ・その時代において信ぴょう性の高い情報で、後の時代に伝え残す価値があるもの。
- ・その他、既存の学術誌や研究報告に掲載するには体裁や情報量に乏しい内容。

このように記すと、ネガティブに捉えられるかもしれませんが、そうではありません。上記のような内容を、公式な文章として利用可能な状態にすることは、本会の目的に大いに資すると考えています。

現在、世の中には学会誌をはじめとする数多の「学術研究発表の場」がありますが、いずれも一定以上の「優れた内容」に達していることが求められます。特に、学会が刊行する学術誌の多くは、敷居が高いのが現状です。プロの研究者が時間と労力、絶え間のない意欲を投入して、厳しい査読（専門家からの修正指示や意見）に耐えて対応することが求められます。このプロセスは、妥当性の高い情報を世の中に送り出すために必要なものですが、その仕組みを利用できる方は限られます。生き物が好きだという気持ちを原動力に保全活動に参加される方や、生き物を育てることを趣味とする飼育愛好家の方々、漁業や農業に従事する方々はもちろ

ん、大学の卒業論文しか論文執筆経験がないといった方々にとっても、得られた情報を世の中に送り出すことは、想像以上に難易度が高いと言えます。その結果として、貴重な情報が頭の中やメモ帳の中に埋もれたままとなったり、たとえ発表をしたとしても、永続的な利用が難しい口頭・ポスター発表止まりとなって、世の中に送り出されないまま、消えていきます。

そうした問題を払拭し、情報を生かすための仕組みとして、地域の博物館や民間の研究所などが独自に刊行する「地方誌」が大きな助けとなっています。ただ、学会誌と比べれば敷居の低いこれらも、掲載難易度を高める傾向があります。また、同分野の同レベルの投稿先が増えることで、それぞれへの投稿数が減る「過疎化」が散見されます。

そのような現状で、本誌がそれらの「消えていく情報」の受け皿になりたいと考えています。当然ながら、一定の信ぴょう性やデータ量は求められますが、既存の学術雑誌よりも市井の方々の持つ情報を世の中に送り出せるよう善処したいと考えています。

3. 投稿資格

本会会員のほか、上記趣旨に合意頂ける方であれば、非会員の方でも歓迎します。まずは投稿の意思を編集委員会までご連絡下さい。

以下の規定に沿って原稿を作成できる方。作成代行は基本的にお受けしませんが、そのサポートは出来る場合がありますので、編集委員会までご相談下さい。

4. 投稿カテゴリー

査読（1名以上の匿名有識者による審査）があるものと、ないものに大別されます。

査読があることで、客観性や公益性がより高いものとみなされます。

査読のある投稿カテゴリー

- ① **短報**：新規性や斬新な示唆を含むものの、データ数が多くない短い内容。10 ページ以内。
- ② **資料**：まとまったデータ数があるものの、新規性にやや乏しい内容。20 ページ以内。
- ③ **原著論文**：まとまったデータ数に基づく新規性に富む内容。本誌では基本的に扱いません。原著論文にすべき内容である場合、しかるべき他誌への投稿をおすすめします。ただし、投稿先に困った場合など、事情に応じてお受けする場合があります。

査読のない投稿カテゴリー

- ④ **雑録**：調査データを主とし、上記 3 カテゴリーに該当しない内容。査読はありませんが、言葉遣いや内容の妥当性を編集委員会でチェックします。
- ⑤ **雑感**：経験に基づく考え方や意見を主とした内容で、妥当性に問題の少ない内容。年配者からの伝聞や、書評、食味の感想なども含みます。査読はありませんが、言葉遣いや内容の妥当性を編集委員会でチェックします。
- ⑥ **会告**：集会の要旨や開催報告、本会から会員の方々への連絡事項など。基本的に編集委員会が発信する内容。
- ⑦ **その他**：集会の要旨や開催報告などのうち、後世に伝える価値が認められたもの。一過性の宣伝や集客などは HP や会員 LINE の利用を推奨します。編集委員会までご相談下さい。

5. 投稿の手順

投稿は常時受け付けています。

最初に、e-mail で投稿の意思を編集委員会までお伝え下さい。

次に、投稿ファイルを e-mail に添付するか（3 MB 以下）、ブラウザ上のファイル転送サービス（ギガファイル便を推奨）の URL を記載することで（3 MB 以上）、ご投稿下さい。

編集委員会から投稿受付の連絡を致します。もしも連絡がない場合、お手数ですが著者の方から編集委員会へ確認を取るようお願いいたします。少人数での運営のため、ご理解のほどよろしくお願い致します。

6. 原稿の採否

原稿の採否、掲載順などは編集委員会が決定します。掲載後に責任著者に論文の PDF ファイルをお送りします。本誌はオンラインのみの公開となりますので、紙の別刷りはありません。必要に応じて著者自身で印刷して下さい。

7. 校正

原稿の内容修正などが済み、掲載可となった後に、レイアウトなどの体裁を編集委員会の方で整えます。その段階で責任著者にレイアウト原稿を e-mail にてお渡ししますので、誤字脱字や図表の挿入位置の不具合をご指摘頂き、編集委員会にお返し頂きます（初校）。その後の校正は編集委員会の方で行います。

8. 著作権と文責

掲載された原稿の著作権は著者に属し、文責（論文の内容に対する責任）は著者が負うものとします。

9. 投稿料

無料です。

10. 出版のペース

原則的に年 1 回とし、掲載可能記事の数に応じて変更する場合もあるものとします。

11. 投稿に関する連絡先

かながわ淡水魚復元研究会 『相模・武蔵の自然探検』編集委員会
勝呂 尚之（編集委員長） nao.suguro0216@outlook.jp
伊藤 寿茂（編集委員） pronodulariajapanensis@yahoo.co.jp
山川 宇宙（編集委員） uchukawaanago@gmail.com

長期間不在になっている委員もいるので、上記 3 名全員へ、お送り頂けると助かります。

12. 原稿の作成方法

①最初の設定

原稿の文章は Microsoft Word で作成して下さい。

最初に A4（縦）に横書き、余白を 3 cm 以上とし、ページ番号と 1 ページ目からの連続行番号を付けて下さい。

1 ページの行数を 25 行前後、一行の文字数を 30 字前後に設定して下さい。編集委員会と査読者が原稿をチェックした際、余白に指摘を書き込みやすくするためです。

フォントは日本語部分を MS 明朝、英語と数字の部分を Century に設定して下さい。

英語と数字は全て半角で入力して下さい。

環境依存文字は出来る限り使わないで下さい。文字化けする恐れがあります。

句読点はカンマ「,」とピリオド「.」で統一して下さい。日本語の場合は全角で、英語の場合は「半角＋半角スペース」として下さい。

数値などの範囲に用いる「から」は、エンダッシュ「-」を用いて下さい。エンダッシュは、Ctrl キーとテンキーのマイナス（-）同時押しで入力できます。似たような記号がいくつかあるのでご注意下さい。

学名は半角イタリック（斜め字）とします。

数字と単位の間には、半角スペースを入れて下さい（例：10 cm）。ただし、°C と %、‰ の場合は半角スペース不要です。

②表紙

原稿の 1 ページ目の最初に、投稿カテゴリー（短報、雑録など）を記して下さい。

その下に、題名、著者名、所属機関とその住所（郵便番号を含む）、キーワードを記して下さい。この部分は英語も併記して下さい。

将来的に本誌がインターネット上で公開された場合に、英語表記があることで、題名やキーワードに含まれる単語の検索で見つけて貰いやすくするためです。学術誌の世界では、英語圏の読者のために本文も英語が推奨されますが、現代では和文だったとしてもブラウザ上の翻訳機能で簡単に翻訳できますので、見つけて貰えさえすれば、内容をご理解頂くことが出来ます。対応が難しい場合には、編集委員会までご相談下さい。

メインの対応者（責任著者）の e-mail アドレスを記して下さい。

③はじめに（緒言）

本文の冒頭に、調査、実験などの目的を中心に記して下さい。結果や考察で詳しく記されることになる「新しい情報」について、ここで簡単に触れることも勧められます。

④材料と方法

調査、実験などを行った日時、調査員の人数、調査研究に用いた材料（魚種や個体数）、作業の手順などを分かりやすく記して下さい。

⑤結果

調査、実験などで得られたデータを記して下さい。重要な数値や観察結果は出来る限り本文中に記して下さい。

⑥考察

結果から明確に示される「新しい情報」や、結果と引用文献の内容を組み合わせることでできる予測を示唆して下さい。短い内容の場合などは、「結果と考察」としてまとめて頂くことも可能です。

⑦謝辞

原稿の著者以外で、内容に大きく貢献した人物や組織名を記すことが可能です。

⑧引用文献

原稿の中で引用したものだけを、筆頭著者のアルファベット順に全て記して下さい。

苗字または名前が一文字の場合、間に半角スペースを入れて下さい。

ピリオドとカンマ、コロンは、日本語の場合は全角で、英語の場合は「半角＋半角スペース」として下さい。

英語の場合、著者名は氏（苗字）を略さず記し、名（下の名前）とセカンドネームをイニシ

ヤル＋半角ピリオドで記します。

論文と書籍、ネット記事などで記し方がやや異なります。以下の例を参考にして下さい。

論文（雑誌の記事）を引用した場合

Kondo T. (1989): Differences in size and host recognition by glochidia between summer and winter breeders of Japanese Unionid mussels. *Venus*, 48: 40–45.

丸山 隆 (1981): ヤマメ *Salmo (Oncorhynchus) masou masou* (Brevoort)とイワナ *Salvelinus leucomaenis* (Pallas)の比較生態学的研究 I. 由良川上谷における産卵床の形状と立地条件. 日本生態学会誌, 31: 269–284.

勝呂尚之 (2005): ホトケドジョウ種苗生産における最適親魚収容数及び魚巢設置数. 水産増殖, 53: 83–90.

近藤さんの頭文字 (K)、丸山さんの頭文字 (M)、勝呂さんの頭文字 (S) で、アルファベット順になっています。

著者 (出版年): 表題. 雑誌名, 巻数: 掲載ページ. の順で記して下さい。

巻、号はいずれも数字のみで記して下さい。前後に () は不要です。

1つの巻の中に複数号がある文献については、号を省略し「巻: 掲載ページ」で記して下さい。

書籍まるごと引用した場合

大越健嗣・大越和加 (2011): 海のブラックバス サキグロタマツメタ 外来生物の生物学と水産学. 恒星社厚生閣, 東京.

著者 (出版年): 本の題名. 出版社, 出版社の所在都市. の順で記して下さい。

書籍の一部を引用した場合

大越健嗣 (2011): 第6章 フローティング, 移動, 捕食・被食関係. 大越健嗣・大越和加 (編) 「海のブラックバス サキグロタマツメタ 外来生物の生物学と水産学」. 恒星社厚生閣, 東京. pp. 119–134.

著者 (出版年): 記事の見出し. 編集者名 (編) 「本の題名」. 出版社, 出版社の所在都市. 掲載ページ. の順で記して下さい。

インターネットの内容を引用した場合

環境省 (2019): 環境省レッドリスト 2019. <http://www.env.go.jp/press/files/jp/110615.pdf> (参照 20 March 2020).

著者 (閲覧年): 記事の見出し. URL (参照日). の順で記して下さい。

これらの引用文献を、論文のどこでどのように引用したのか、本文中に記す必要があります。

著者名 (出版年) または (著者名, 出版年) のかたちで、引用した内容の文章の最後 (ピリオドの前) に記します。

著者が2名までの場合、日本語では著者間をナカグロ「・」でつないで下さい。英語では著者間を「&」でつないで下さい。

著者が3名以上の場合は、第1著者の後に日本語では「ほか」、英語では「*et al.*」と半角イタリック (斜め字) で記して下さい。

1ヶ所で複数の文献を引用する場合、年順で並べ、間をセミコロン「;」でつないで下さい。例外として、引用文献として表示された著者名が同じ場合は、出版年の間をカンマ「,」でつないで下さい。

例

サキグロタマツメタという巻貝は、水面に浮きあがって波に乗って移動する（大越・大越，2011）。

イシガイ類の繁殖期は夏繁殖と冬繁殖に大別される（Kondo, 1987, 1989）。

ハゼ類の体にイシガイ類の幼生が寄生していた（上杉ほか，2017；伊藤ほか，2022，2023）。

その他、文章として公表されていない知識や伝聞の内容を「私信」として、これから公表予定の内容を「未発表資料」として引用できます。その場合、情報元の方の名前をフルネームで併記します。内容の責任は、情報元の方ではなく、著者が負うものとします。

例

相模川の中流域にはタテボシガイが生息していたらしい（高橋由紀男氏，私信）。

ジャパンプルーグッピーは相模川に帰化した個体から作出された品種である（ワイルド☆スターズ 10・2，私信）。

馬入橋の上流付近でフタバカクガニが確認されている（一寸木肇氏，未発表資料）。

その他、ご不明の点につきましては、公開済の各論文を参考として頂くか、編集委員会までお問い合わせ下さい。

⑨図表

図表は jpeg ファイルとして、原稿の末尾に割り付けて下さい。

A4 サイズで表示されたときに、文字の読みやすさや形状の確認しやすさに配慮して作成して下さい。

図表が複数ある場合、図 1、図 2 と番号を記して下さい。

1 つの図表の中に複数の画像やグラフがある場合、それぞれにアルファベットを振って図 1A、表 2B などとし、分かりやすくして下さい。

これらの図表を、論文のどこでどのように引用したのか、本文中に記す必要があります。以下の例を参考に、適切な位置に記して下さい。

例

調査の結果、ホトケドジョウをはじめとする 5 魚種が確認された（表 1）。

ホトケドジョウについては、稚魚（図 1A）から成魚（図 1B）まで確認された。

1 3. 規定の適用期間

本規定は本誌 2 号から適用します。会員の皆様からのご要望を踏まえまして、編集委員会の方で改訂する場合があります、本会 HP 上や本誌でお知らせ致します。

2025 年 7 月 20 日 文責 「相模・武蔵の自然探検」編集委員 伊藤寿茂